

養育里親

～もうひとつの家族～

3

坂口 伊都

はじめに

この連載も 3 回目を迎えました。執筆者の一人として 11 月に行われた対人援助学会の理事企画ワークショップ「対人援助マガジンを考える～書き手として、読み手として～」に参加してきました。そこでは、原稿枚数の規定も原稿料もないのにも関わらず、締切を守る執筆者の思いに触れることができました。長く連載を続けている方は、発信し続けることでの変化が起きていました。どの執筆者にも締切日は、重くのしかかっている様子もよくわかりました。私も、この連載を大切に書き続けていきたいと思っています。

今回は、児童相談所の家庭訪問を受けた事を中心に書いていきます。養育里親になりたいと

意志表明をし、書類を提出し、家庭訪問の日を迎えました。子どもの話も聞かせてほしいということもあり、夕方から始まりました。

お父さんとお母さんは、どんな人？

児童相談所の方が来るというので、我が家は緊張に包まれていました。何人来るの？何するの？と子どもが尋ねてきますが、こちらも初めての経験なので、どれくらい時間をかけて聞き取りをしていくのかわからないでいました。

現れたのは 2 人。里親担当のなじみの方と本庁で里親業務の担当をしている方でした。さあ、何が始まるのでしょうか。まずは、お茶を出し

て、挨拶。緊張の面持ちで挨拶をする息子と娘。にこやかに対応してくれる児童相談所のワーカーから、「では、まず子どもさんに質問しましょうか」という言葉で始まりました。

最初の質問は、「お父さんとお母さんは、どんな人？」でした。いきなり、核心部分です。何を言ってくれるのだろうと待っていると、はにかみながら出た言葉は、「怒ると怖い」でした。それも、2人とも。第一声が、それなのと仰げ反りそうでした。里親認定につながる家庭訪問で、第一声が怒るとこわいでは印象が悪過ぎるでしょう。ワーカーは、「怒るとどんな風に怖いの？」「叩かれたりする？」「お父さんとお母さんとどっちが怖い？」と質問を続けます。針のむしろとは、こういう場面を言うのでしょうか。何を言い出すのか、気が気ではありません。

話していく内に、「いつもは、やさしい」という言葉が出てきて一安心しました。子どもが親のことを親の目の前で改めて語る場面は、あまりありません。そんな風に見えるのかと教えてもらう場面になりました。

ただ、第一声が怒ると怖いとは、ショックでした。日常的に怒りまくっている認識はなく、和やかに対応している時間の方が、夫も私も圧倒的に多いだろうと感じていました。また、怒ると私よりも夫の方が怖いというのも発見でした。夫は、いつもふざけ半分でにこやかに接している分、怒るとその変化が大きく子どもに映るのかもしれませんが。どちらにしても、子どもにとって叱られるという体験は、大人が思っている以上に子どもに影響している事柄なのでしょう。

児童養護施設京都聖嬰会の元施設長、井上新二氏は、『児童養護施設の子どもたちの思いと願い-京都聖嬰会の子どもたちと、ともに生き、ともに歩む』（明石書店）の中で、「小声で叱る」ことの意味について書いています。

児童養護施設でも、様々な場面で子どもたち

を指導しなければならないですし、集団で生活をしている背景もあるので、つい大声で指導してしまいがちになります。ただ、その方法では子どもたちの心に届かないといいます。体罰はもちろん、怒鳴ったり、激しく声を張り上げて指導したりしないで、「厳しいけれど、怖くない指導」「優しいけれど、甘くない指導」を求めてきたそうです。

井上氏が施設長に就任し、小声で叱ることを掲げた時、多くの職員はできるわけがないと思っていたようですが、それでも言い続けたそうです。そんなある時、万引きを辞めない子どもにこれ以上何をしたらいいのかわからなくなった職員が、井上氏に子どもを託しました。その際に井上氏は、子どもに小声で語りかけ、子どもの声に耳を傾け、小声で叱ると、子ども自身がいろいろな想いをポツリポツリと語り始めたそうです。その様子を見て職員が、この子がこんなに冷静に話す子どもだったのかと驚き、これが「小声で叱る」という意味なのですねと井上氏に語ったというエピソードを伺いました。

また、井上氏は小声で叱るという考え方の背景には、子どもたちを「力」や「恐怖心」によってコントロールしようとする限り、常に児童虐待の「芽」や「牙」を孕んでいると感じ、虐待を受けてきた多くの子どもをたちはこれ以上傷つけないという思いがあると語っています。

よく、甘やかすと子どもはつけあがる、子どもには厳しく接するべきだという言葉が耳にします。何でもかんでも、子どもの言いなりということは、私も賛成しませんが、感情的に怒鳴りつけたり、力で抑え込もうとするのは、あまり効果的ではないと感じています。それは仕事で、小学校高学年や中学生になった子どもが言うことをきかない、暴れて抑えられないという相談をよく受けるのですが、今までの叱り方を聞いていると、力で子どもを抑えつけ、小さい

頃はおとなしく従っていたが、身体が大きくなると、子どもの方が力で親を抑え込もうとしている状況によく出会うからです。

子どもは、大人からしてもらった事を再現します。暴力を受ければ、他者に暴力をふるいますし、ありがとうと言われていれば、他者にも感謝の気持ちを伝える行動を見せます。子どもに対して、どのように叱っていくのかは、子どもにとって大きく影響することを実感したので、これを自分の戒めにしていこうと思っています。

家庭の事情

冷や冷やした子どもへの面談が終わり、子どもは自分の部屋に行き、大人の面談に切り替わりました。家庭訪問の前に一通りの書類を提出するのですが、その書類内容にそって質問されていきます。その書類は、我が家の個人情報を開示しましたという内容です。履歴、収入、借金、健康状態、住宅の見取り図、子育て観、自分の育ちについての記入欄もありました。ここまで、自分たちの事をさらけ出さなければならぬのだなと感じました。

その中でも、答えにくかったのは自分の育ち方についての部分でした。それほど大きな欄もないのですが、いろいろと感じる事が多い自分の育ちについて、この枠の中にどのように誤解されないように表現するべきかと、最後まで悩みました。

一方の夫は、7人家族という大所帯の中で育ち、伸び伸びそだったという思いがあるので、さらさらと書き込んでいきます。どこの家庭でも、いろいろな事情はあるものですが、夫の家族は自分たちの事を明るく語ります。これは、大きな力だと思います。その中で、聞き込んでいくと、大所帯ならではの悩みや葛藤が見えてきますが、書類の中の欄で語るには、大所帯での育

ちは十分な役割を果たしていました。

私の方は、母一人子一人の母子家庭での育ちから始まります。私の小学校時代は、各クラスの名簿が出され保護者名も出ていました。その中で女性の保護者名は、クラスに一人いるかないか程度でした。父親と暮らしたことのない私は、子どもの頃から父親を知らず、母親の言いなりにしか動けない自分に苛立ち、いつも身体にポツカリと穴があいた感覚をずっと抱えていました。

社会福祉の道に進む時も、葛藤を感じていました。その葛藤と向き合うために、家庭訪問が終わってからになりますが、京都国際社会福祉センターの対人援助職のための自己覚知「原家族と向き合う」という3日間の短期集中講座を受講しました。

自己覚知とは、己自身を知ることです。対人援助職として己の生育歴や思考パターンを理解し、利用者に対して感情移入や、攻撃的になってしまったりすることを防ぐ意味合いがあります。

里親は、子どもと生活を共にします。自分の家庭に子どもを引き受けるので、子どもに与える影響はとても大きく、養育者との関係が上手く築けない不調状態になった時、施設養護よりも里親養護の方が、子どもの傷が深いと言われています。子どもに辛い思いをさせないためにも、里親が自己覚知を行う必要があると感じています。

自己覚知の講座では、父親との関係について取り上げました。母親との関係については、物心ついた時から、自問自答を繰り返し、社会福祉での学び、家族を持ったこと、そしていろいろな方との出会いの中で、自分の中に整理をつけていました。父親との関係の方は、日常生活の中にいない人で、過ごした時間も短く、何を考えているのか見当がつかない存在です。父親という一番近い血縁ですが、一番遠くにいる存

在でした。講座では、早樫先生がこの対人援助学マガジンで連載していた家族造形法をします。私の時の登場人物は、父と母と私の3人だけ。小学校時代をイメージして作りました。母と私は、すぐに形を作れましたが、父親をどこに置いたらいいかわかりません。悩んで遠くに置き、母と私の方をチラッとみるように作りました。

その造形法で、父と私の関係は、私が思っているほど悪くないのではという意見をいただきました。驚きでした。私は、父親にとっていない存在、迷惑な存在だと思っていたので、父親と年に1回程度会うようになってからも、心を閉ざし続けていたのだらうと気づかされました。だから、いつも父と会うときは、義務感から重たい気持ちを引きずり続けたのだと思います。

今思えば、あの時の父の取った行動は、父親なりの精一杯の子どもに向けた気持ちだったかもしれないと思う出来事を思い出しましたが、父は不愛想な方で愛情一杯の表現ができない人でした。仮に父が愛情一杯の表現をしてくれても、子どもの私は決して満足することはなかったのではないかと思います。確信はありませんが、もしかしたら父は、私を少しはかわいいと思ってくれていたのかもしれない。

しかし、現在の父は認知症です。私のことをどこまで理解しているのかもわかりません。もう、父を通して確かめる術はありません。ひにくなものだなと感じる一方で、確かめても父からはっきりとした答えが返って来るとも思えません。そんなコミュニケーションができていれば、悩む必要はなかったでしょうから。

家族の形はそれぞれで、家族間の距離の取り方もまたそれぞれあり、その形を受け入れることから子どもは前に進むことができるように感じています。

家庭訪問では、自分の生い立ちについて誤解がないように必死に語りました。書類の全項目

に答え、家の中を見てもらって終わったのは3時間後でした。私たち家族もへとへとですが、児童相談所のワーカーさんも相当に疲れたことでしょう。

過去は変えられない

里親になる過程には、自分の過去と向き合う場面が出てきます。夫のように愛されて育ったと感じている人はいいですが、何か育ちに感じるところがある人にはしんどい作業になるかもしれません。誰もが、親になると自分が子ども時代にされたことを繰り返そうとします。子どもを通して、自分の子ども時代が蘇ってくることもあります。目の前の子どもを傷つけないためにも、自分の生い立ちや思考パターンを自分自身で理解する必要があると思っています。自分の生い立ちに振り回される必要はありません。

自己覚知の講座で、「自分の過去は変えられない。子どもであれば、なおさら子ども自身の力で状況を変えることは不可能だ。ただ、これから何を選んで生きていくかはできる」と言われました。このような言葉を今まで誰からも聞いたことがありませんでした。この言葉をかけていただいた経験は、私の大きな支えになっています。子どもの時に気づくのは難しいかもしれませんが、次は私が子どもに伝え続けていく大人でありたいと思っています。